

近世フランスの歴史記述

——フランス「国民」の起源問題を中心に——

阿 河 雄 二 郎

はじめに

フランス史学史の観点から近世（一六—一八世紀）の歴史学の流れを眺めると、いくつかの特色が浮かび上がってくる。⁽¹⁾ そのひとつは、一六世紀のユマニスム運動の一環としての「考証研究（*érudition*）」の進展や、一七世紀後半のマビヨンの「古文書学（*diplomatique*）」の確立により、近代歴史学の方法論につながる基礎が築かれたことである。それとの関連では、一六世紀中葉以降、国王の傍らに「フランス修史官」と「国王修史官」という官職が創設され、王権に奉仕する歴史家のグループが形成された。⁽²⁾ 彼らの任務は、中世の「フランス大年代記」のスタイルを踏襲して、王家を中心とした通史のジャンルである「フランス全史（*Histoire de France, Histories Générales*）」を記述することにあつたが、初代のパシャル以後、一六世紀ではオトマン、ベルフォレスト、デュ・アイヤン、ヴィニエなど、一七世紀ではゴドフロワ、デュブレクス、メズレー、コルドモワなど著名な歴史家が任命されており、通史としてのフランス史の構築にかける王権の並々ならぬ意欲を想起することができる。なお、煩雑な文書行政が進行するなか、

王権の側では、公文書の蒐集や分類、収集された文書の真贋の判別、正確な読解、年代決定などの仕事を専門的な歴史家に期待してもいた。マビヨンが定立した「古文書学」にしても、歴史学の自生的な発展という以上に、王権側のプラテイクな要請に応えた面を考慮しなくてはならない。この点は、バレリクリジエルの研究が明らかにしているところである。⁽³⁾

もうひとつは、歴史の対象領域の拡大である。⁽⁴⁾ 中世にも多くの歴史家が存在し、年代記、教会史、都市史などさまざまな分野にわたって歴史書が綴られてきた。けれども、「考証研究」の勃興により、記述内容の信憑性が問われるにつれて、伝統的なスタイルの歴史書は徐々に姿を消す定めにある。それに代わって新しい歴史書は、その時代のポレミクな問題意識を投影して、同時代史や通史が重要な地位を占めるようになった。そのなかでは、宗教改革以来のカトリックとプロテスタントによるイデオロギー論争や、君主政の正統性をめぐる議論が相変わらず幅をきかせているが、それと並行して、フランスの伝統的な法、慣習、言語など（＝「ガリアの慣習 (Mos Gallicus)」と呼ばれる）が注目を集め、それらの研究成果をふまえて、古い時代のフランス史に関心が注がれるようになった。⁽⁵⁾ このような状況からは、これまで理想化されてきたギリシア・ローマの古典古代の世界に対抗して、フランス固有の歴史的過程を回顧し、積極的に評価しようとする意識が感じられる。

もっとも、上述した近世の歴史学が、近代歴史学の成立に向けて順調な歩みを辿ったわけではなかったことも強調しておかなくてはならない。ちなみに、ビジュアルとヴェンエールの『史学史』は、この時期の歴史学の動きを、「歴史学革命」としての一六世紀、「歴史学の停滞」としての一七世紀、「歴史学の再生」としての一八世紀に三区分別し、一七世紀にはネガティブな位置づけしか与えていない。⁽⁶⁾ なかんずく一七世紀の歴史学は深刻な危機に陥ったといわれる。その最大の理由は、歴史学がキリスト教のもつ神話的で、撰理・終末論的な歴史観から脱却できず、また、

中世後半以降、伸長しつつある王権の要請に依えて、君主政の偉大さや栄光を「物語る」役割を担ったからである。この点で、一七世紀の「知」を代表するデカルト学派が歴史学への不信感を募らせていたことはよく知られた事実で、前川貞次郎氏が指摘するように、客観的な事実と物語的な寓話を混同し、真理の探究という大きな目標を見失った歴史学は文学や修辞学以外のなにもでもなかった。⁽⁷⁾ 史家レイナムは、歴史研究に不可欠な批判的精神を欠き、君主を称えることに熱中した高名な歴史家たちを「著述家 (sivain)」と呼び、国王に奉仕する「栄光の芸術家 (artisan of glory)」とも形容して、歴史学の歩みが著しく阻害されたと断じている。⁽⁸⁾

このようにみると、近世前半にあたる一六一一七世紀は大きな転換期であり、歴史学の停滞という状況はあったにせよ、中世伝来の個々の社会集団の利益や主張を超えた、より包括的で普遍的な視点からフランスの王国史や民族史を発想したところに時代としての新味があつたといえよう。本稿では、そうした過程で生み出された歴史書や、それを記述した歴史家に焦点をあて、とくにフランスの起源がどのように説明されたか、それをめぐってどのような論争が繰り広げられたかに絞って考察し、近世前半期に歴史学が抱えていた歴史意識の一端を明らかにしたい。

一 フランス「国民」の起源問題

近世前半の歴史家は、フランスの起源をどのように捉えていたのだろうか。一般にフランス史は、メロヴィング、カロリング、カペの三王朝の歴代国王の事績と王朝の交代劇をクロノロジカルに叙述することに重点がおかれ、メロヴィング王朝以前については、後述するフランスのトロイア起源伝承を簡単に紹介するに留まっていた。そこに疑問を投げかけたのが、「考証研究」をもとに、フランスの古い法、慣習、言語などの解明を体系的に推し進めた主に法

学者による研究である。一六世紀には、ブルジュ、アンジェ、トゥルーズなどの大学に拠点が形成され、イタリアからやって来たアルシアを開祖とし、キュジャス、ボダンなど著名な法学者を輩出した。⁽⁹⁾ また、一五世紀末からは、王令によって地方の慣習法が組織的に編集されていたが、デムーラン『パリ慣習法註解』（一五三二—一五二一年）をはじめ、シヨパン、ピトウ、コキューなどの法学者による編纂事業が着実に成果をもたらしていた。このような「ガリアの慣習」の解明は、やがて古典古代に比肩すべきフランスの慣行や伝統の存在という認識を促すこととなったが、あわせて、フランスには、ローマの支配以前に輝かしい過去をもった時代があったことを自覚させるきっかけともなった。古代ガリア、ケルト世界の発見である。

事実、フランス史を叙述するにあたって、ガリアの問題は大きな政治的波紋を投げかけたのである。⁽¹⁰⁾ 一六世紀でみると、とくに宗教戦争が激化するにつれ、プロテスタント急進派やカトリック・リーグ派に属する反王権論者は、古いガリアの制度、風習、文化に高い評価を与えた。たとえば、ガリアの人民がすべて集った「五月の集会」はまさしく全国三部会の淵源であるとか、新しい王を盾の上に乗せて場内をめぐる推戴の儀礼は国王の即位に人民の同意を必要としたことの証であるといった議論がなされたのである。ガリアの統治形態は、貴族・聖職者・賢者による「徳治」や「共和」として理想化され、礼賛の対象となった。ドルイド教とキリスト教の親近性や、ケルト語とギリシア語との類似性に言及する場合には、ガリアの人民が野蛮人でも邪宗の教徒でもなく、むしろ知的で敬虔な「擬似キリスト教」文化を享受していたことが指摘された。反王権論者は、ガリアの遺制の称揚という形をとって、国王の専制政治や、場合によっては君主政そのものへの反発を表明し、国王と人民とのあいだにあったはずの麗しい協調関係の復興を提唱したのである。

一方、王権論者は、君主政の原理になじまない古代ガリアをほぼ考慮の外におこうとした。しかし、対外的な面

で、ヨーロッパ世界におけるキリスト教共同体の意識が次第に失われ、イタリア戦争（一四九四—一五五九年）のように、フランス国王がドイツ皇帝とヨーロッパ覇権をめぐって抗争を始めると、フランスには他のヨーロッパ諸国とは異なる独自のアイデンティティの源泉が求められるようになった。⁽¹¹⁾ フランスがイタリアやドイツの領有権を主張する場合に、シャルルマーニュやクローヴィス以前の過去に遡って、支配の正統性の根拠が説明される必要があったのである。また、国内的な面でも、およそ一六世紀頃を境にフランス王国という領域観念（あえていえば「国土」）が力を得てくると、フランス史を王家の歴史だけで済ませるわけにはいなくなってきた。フランスの領域内に住む人びとをも視野に入れた歴史、すなわち、原初的な段階ではあっても、「国民（nation）」の歴史を描くことが期待されたのである。この点では、「フランス修史官」や「国王修史官」が一六世紀中葉に新設されたのは偶然ではない。歴史にあまり関心を示さなかったといわれるカトリヌ・ド・メデイシスは、政治問題の助言者としての歴史家を頼りにしていた。⁽¹²⁾

こうして、王権論者にとっても、古代ガリアやフランスの起源は避けては通れない課題となった。ただし、彼らには、古代ガリアに匹敵しうる、伝家の宝刀ともいべきもうひとつの起源論が準備されていた。それが「フランスⅡ トロイア起源」説である。この考え方は一六世紀の「考証研究」の系譜をひくものではないが、すでに中世初期から国王の周辺で伝承された建国物語であった。

二 フランス「国民」の起源をめぐって

——「フランス」トロイア起源」説の展開——

フランス人（というよりも、フランク人といった方が適切である）のトロイア起源説は、中世初期のメロヴィング王朝時代に始まる。七世紀のフレダガリウスの『フランク史』によれば、トロイアの勇士アエネアスとも因縁の深いヘクトルの息子であるフランクス（フランシオンともいう）が、トロイアの陥落のとき、城外に脱出してライン河の方面に王国を建設した。⁽¹³⁾ フランクスがフランクの名の起源である。また、八世紀に記された『フランク王国の歴史』によれば、トロイアの落城で逃れた人びとがシカンブリア（パンノニア）に王国をつくり、のちにアラン族の討伐のためにローマ皇帝ヴァレンティニアヌスと同盟を結んだものの、やがてローマの圧政に抵抗してゲルマニアに脱出し、フランクの基礎を築いた。フランクの名は、ローマ皇帝から一〇年間免税の特権を与えられたこと（フランク＝自由人）に因んでいるという。⁽¹⁴⁾ こうした物語がすでにメロヴィング王朝時代に伝承されていたのは驚きであるが、ボーンの指摘によれば、新興のメロヴィング王朝にとって、フランク王国の威信を誇示するためにも、今はなきローマ帝国領を継承する正統性を喧伝する意味からも、この伝承は必要不可欠なものだった。⁽¹⁵⁾ ヴェルギリウスの『アエネイス』がローマ建国の物語をもっとも由緒正しいギリシア神話から借用している以上、ローマの傍系を自認するフランク王国も、アエネアスとつながりをもつことは都合がよかった。

この素朴なトロイア起源神話を、より真実味を帯びた形で流布させたのは、一三一一五世紀の「フランス大年代記」と呼ばれる一群の歴史書である。史家グネは、この年代記成立の背後に、当時のカペ王家と関係の深いフルーリ

修道院（現サン・ブノワ・シュール・ロワール修道院）、ついでサン・ドニ修道院の策謀を見出し⁽¹⁶⁾ている。カペ王家と密接なつながりをもつこれらの修道院は、公式のフランス王朝史の編纂を通して王家の手厚い庇護を期待していた。王権にとつても、有力な修道院の支援が得られることは、王家の聖性を一段と高めるものだった。その際、一三世紀末の歴史家リゴールやプリマによつてトロイア起源論の骨格が固まったことは、大きな意味をもつた。⁽¹⁷⁾第一に、トロイア王のプリアモスからヘクトルを経てフランスへ、さらにフランスの諸王にいたる四〇代に及ぶ系譜が提示された。第二に、フランス王国の最初の王とされるファラモンがサリカ法を制定したという伝説が成立した。第三に、ファラモンから四代後、正式にフランス王国の王と認められるクローヴィスにまつわる伝説が形成された。こうした伝承は、フランス王国が神から選ばれたという正統性を付与するものであり、一五世紀後半の歴史家ジルやガガンの年代記にも取り入れられたが、江川温氏によれば、サン・ドニ修道院が聖人崇敬として推進したサン・ドニ信仰の及んだ地域は北フランスに留まって、南フランスには広がらなかった。⁽¹⁸⁾サン・ドニ修道院の影響力にも、王権の浸透力にも限界があつたようである。

こうした状況を大きく変えたのが、一六世紀初頭のルメール・ド・ベルジュ（以下、ルメールと略記）の著作『ガリアの頌揚とトロイアの不思議』（一五一一—一三三）であつた。⁽¹⁹⁾一五世紀後半のブルゴーニュ公の宮廷に出入りした詩人で、王妃アンヌ・ド・ブルターニュ付きの修史官としても活躍したルメールのこの書物は、従来のトロイア起源説に聖書研究とガリア研究の成果を混ぜ合わせて集大成したもので、当時の宮廷にセンセーションを巻き起こした。

アッシャーの分析によれば、ルメールはさまざまなたロイア起源論を並列的に用いている。⁽²⁰⁾そのひとつは、ガリアの歴史を『旧約聖書』のいわゆるノアの洪水と関連づけたもので、大洪水のあと、ノアの第三子ヤベテの第四子サモ

テは、流浪のあげくガリアの地にやってきて、ガリアを建国した。やがてガリアは繁栄し、人口も増えたので、王族の一部の人びとはギリシアに植民活動をおこなってトロイアを建設するにいたった。しかし、周知のようにトロイア戦争が勃発し、ヘクトルの子フランスは落城寸前のトロイアから脱出してガリアに舞い戻った。一部のトロイア人はシカンブリアに踏みとどまって王国を建設したが、ローマ皇帝アウグストゥスの好意でゲルマニアに移住し、ついにガリアに戻って、すべてのガリア人が合流したというのである。いまひとつは、フランスのガリア起源論ともいべき解釈である。スペイン方面に遠征したヘラクレスは、ようやくガリアに辿り着き、美しいガリアの王女であるガラテアを見初めて結婚した。そこから生まれた息子ガラテスがガリアの由来とされる。やがてガリアは繁栄し、小アジアのトロイアにまで領域を広げた。ガリアの王ヤシウス・ヤニゲナとトロイアの創始者ダルダヌスは兄弟であるという。ところが、ここでもトロイア落城の悲劇により、ヘクトルの子フランスはシカンブリアを経てガリアに帰還し、ガリアの王となった。このとき、トロイア王ブリアモスの一族もこの方面に移住して、ベルギー・ガリアの王となった。これが、メロヴィング王朝の宮宰ピンヤシャルルマーニュの家系（カロリング家）の祖先であるという。

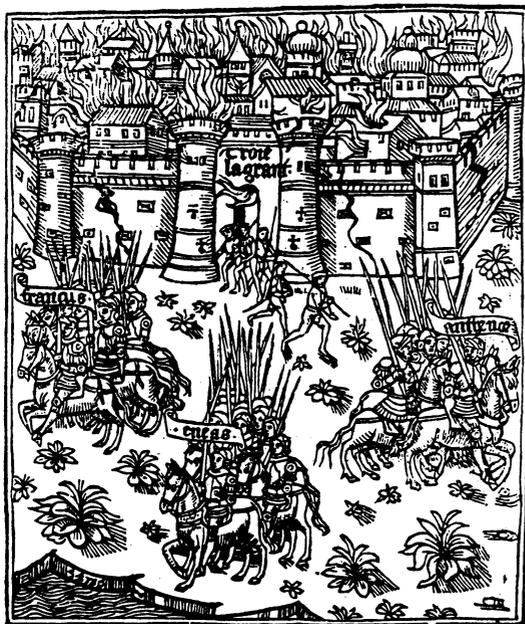
ルメールのトロイア起源説のオリジナリテイは、前述した「フランス大年代記」の基礎となっていた「フランス王家Ⅱトロイア人」起源説をふまえつつも、ガリアへの強い思い入れから、「フランス王家Ⅱガリア人」起源説へとつなぎ変えようとしたことにある。フランス王家の祖先であるフランク人は、トロイアから流浪してきた民族などではなく、初発からガリアの地に居住していた誇り高い民族だったというのである。それは、一六世紀の「考証研究」以前に細々と続けられていたガリア研究の成果を逸早く取り入れた、大胆で気宇壮大な民族の物語であつた。さらに、王家の血筋をより高貴なものとするため、ルメールは、王家の起源を『創世記』に登場するヤベテを介してノアにまで遡らせようとした。逆にいえば、フランス王家は大洪水で生き残った神聖な家族の子孫、ダヴィデ王の一族という

ことになる。なお、ルメールが掲げる歴代国王は四〇代ほどで、初代はヤペテの子のサモテで、トロイアから帰還したフランクスは二三代目にあたる。『創世記』にはヤペテの子供の名が七人記されているが、サモテの名は見当たらない（ガリア研究者の多くは、サモテをゴメルに比定している）。とはいえ、フランス王家の家系を聖書にまでつなげようとの試みは意味深長で、カペ王家の尊厳を強く意識していたことの表れである。フランスの王家は、ヨーロッパ諸国の王はもとより、ローマ皇帝をも凌いで、まさしく世界に君臨する尊い血筋をひく家系となつたのである。折から、フランソワ一世はドイツ皇帝カール五世と「帝国」の継承をめぐる論争を繰り返して来たので、ルメールのこの解釈はフランソワ一世の対外政策に大きな支えとなつたであろう。⁽²¹⁾

ただ、ルメールの書物はフランスの宮廷でこそ称賛を博したが、イタリアやドイツでは批判が根強かつた。その第一の理由は、カール五世がそうしたフランスの優越論に嫌悪感を抱いたからであるが、すでに一五世紀末にキケロの書物が知られ、タキトゥスの『ゲルマニア』が発見されて、古代ゲルマン人の状況を説明する糸口が得られていたからでもある。研究の進展とともに、やがてフランク人はゲルマン人の子孫であるとする学説が有力となつた。一五二四年、ドイツの古典学者トリテミヌスは、古代のフニバルドゥスの書物を発見し、その記述をもとにトロイアの陥落からクロウヴィスにいたる長大なフランク人の歴史を書いた。それによれば、フランク王国を創始したファラモンは四三代目の王にあたる。次いで、同じくドイツの学者ベアトゥス・レナヌスは、トリテミヌスによつて発見されたフニバルドゥスの書物を偽書と断定するとともに、フランク人は紀元三世紀以前には歴史上の存在が確認できないこと、また、フランク人は本来的に海の民であり、ゲルマン語を話すことを根拠に、フランク人をゲルマン人、つまりドイツ人の祖先であると結論づけたのである。⁽²²⁾

ルメールの解釈に否定的なこのようなドイツやイタリアの学説は、当時のフランス宮廷には届かなかつたようであ

る。一五四九年、アンリ二世がフランスでの聖別式を終え、パリで「入市式」を挙行したとき、国王を歓迎してパリ市内の各所に設置されたアーチや舞台では、さまざまなガリアの象徴物が展示された。パリ市の儀礼面での正門にあたるサン・ドニ門には、前王フランソワ一世が口から出す鎖で国民を象徴する聖職者・貴族・司法官・農民の四身分をつなぎとめた裸体のヘラクレス像で図像化された。⁽²³⁾このあと、フランスでなじみとなる「ガリアのヘラクレス」の図案化である。深まる宗教対立の緩和をはかって、一五七一年シャルル九世を称えた「入市式」のとき、ガリアとフランス(＝フランス)の英雄であるフランクスとアラモン、ピピンとシャルルマーニュの彫像が制作された。⁽²⁴⁾国王とパリ市民との協調関係を示す「入市式」において、少なくとも一六世紀末まで神秘的な内容をもつ歴史絵巻が視覚的にも繰り返り広げられていたことは、とても示唆的である。



トロイアから脱出する人びと
(出典) R. E. Asher, *op. cit.*, p. 20.

一五三一年に刊行されたブーシェ『新旧の家系図』の挿絵(図を参照)には、トロイアの陥落の前に、燃えさかる城門から落ちのびてゆく三つの整然とした集団が描かれている。⁽²⁵⁾中央はアエネアスが自ら率いる本隊で、ヴェルギリウスの物語のとおりイタリアを目指す。向かって左側にはフランクスが率いる一隊がある。これが遠路ガリアに

向かうグループである。向かつて右側にはアンテノールの一隊が描かれているが、これは北イタリアを目指す。アンテノールは北イタリアのヴェネツィアやパドヴァを建設したと信じられている。遅ればせながら後世のイギリスでも、トロイア起源説にあやかつて、トロイアから脱出したブルトゥスが海を渡つてブリタニアを建国したという伝説が創出された。

後述するように、フランス人のトロイア起源説に対する批判がフランスで本格化するのは一六世紀後半である。その間、宮廷だけでなく、一般にも広くトロイア起源説が支持を集めていたのは、その学問的な信憑性とは別に、初期的とはいえ、さしあつて王家を中心に据える「国家」や「国民」の意識が息吹いていたからであろう。一六世紀には、民族のアイデンティティが強く刺激されたのである。

三 「フランスとトロイア起源」説への懐疑論

さて、一六世紀も半ばになると、ドイツの「フランク人＝ゲルマン人」学説がフランスでも知られるようになり、むしろ支配的となった。にもかかわらず、フランスでトロイア起源説が命脈を保ったのは、レナヌス説を認めた場合、フランス人の祖先がゲルマン人（ひいてはドイツ人）となり、ガリアはフランク人に征服されたことになって、フランスの名誉が大幅に損なわれるからである。王権にとつても、王家が征服民の子孫であるという見解は、国民統合の見地から好ましいものではなかった。そのため、当時の歴史家のなかには、フランク人によるガリア征服以前に、すでにガリア人がライン河を超えて東方に植民活動を展開しており、つまり、元来フランク人はガリア人の一部族であつて、再び故郷のガリアに帰還したのだという苦しい解釈を試みるものがあつた。ガリアとフランクの両民族

の伝承を調整・折衷させようというのである。もともと、この解釈は、その時期のガリア研究の成果と符号する面はあった。カエサルによる征服以前に、ガリアの地に住んでいたガリア（ケルト）民族の実態が明らかにされつつあったからである。

イタリヤからフランスに帰化したポール・エミリの『ガリアの古代について』（一五二〇年頃）をはじめ、ギヨーム・ド・ベレー『古代ガリア概要』（一五五六年）、ポステル『洪水以後の記憶すべき歴史』（一五五二年）などによれば、太古の時代（おそらく紀元前一〇世紀よりもはるか前）、ケルト人はヨーロッパ各地を遍歴した民族だった。⁽²⁶⁾ガリアはそのひとつの重要な拠点である。しかし、繁栄の一方で、人口増加によって苦しんだため、彼らは籤引きをおこない、シゴヴェズとペロヴェズという隊長がそれぞれ一団を率いてゲルマニアとイタリヤの方面に植民活動をするようになった。そのうち、トロイアを築いた前者の人びとは、一時ギリシアを支配するほどの勢いを示した。また、北イタリヤに移動した後者の人びとのうち、紀元前四世紀の族長ブレヌスの軍団は、ローマ市内に侵入して、ローマから莫大な身代金をせしめた。ケルト人の来寇に苦しんだローマが危機を脱したのは、ポエニ戦争でハンニバルに味方したケルト人がローマ軍に大敗を喫した紀元前二―三世紀のことであった。ローマがガリアを「アルプスのこちら側のガリア（*Gallia cisalpina*）」と「アルプスの向こう側のガリア（*Gallia transalpina*）」に区分したのは、ガリア人に対するローマ人の恐怖の名残であるという。

ガリア（ケルト）人がヨーロッパ各地に出没したのは、古代ギリシアの歴史書にも記述された信頼性のある出来事だったので、一六世紀の歴史家は、ガリア人がトロイアを建設したことをはじめ、ガリア人がゲルマニアに移住したこと、ガリア人とフランク人が血縁的にもつながっていたことを、それほど無理なく受け入れることができた。しかし、そうした折衷的な見方に徹底的な批判を加えたのが、一六世紀後半の「考証研究」をものした歴史家や法学者で

あつた。以下では、それを代表するパキエ、オトマン、ボダンの見解を紹介しておきたい。

パキエは、「証拠に基づかないことは何も言わない」をモットーに「ガリアの慣習」研究を目指した考証主義の歴史家である。⁽²⁷⁾彼の代表作『フランスの探究』（一五六一—一六二二年）全一〇巻は、当時の知識人がラテン語での記述にこだわったのとは対照的に、フランス語で書かれた。そこに彼のナシヨナリストとしての片鱗が窺われる。本稿との関係でみると、ガリアの起源の問題を扱ったのは第一巻の第一章である。そのなかでパキエは、古典文献にまったく記載されないフランクスの物語やフランク人のトロイア起源説を、フィクションで寓話にすぎないと一笑に付した。パキエは「敗北したトロイアは名譽ある民族とは思われない」のに、どうして世界の人びとがトロイア出自に固執するのかよくわからないと述べ、「ひとつの民族の崩壊から、どうしてこんなに多くの民族が生まれたのだろうか」と皮肉っている。⁽²⁸⁾

パキエにとつて重要なことは、古代ギリシア・ローマとは異なるフランスの価値観や精神風土の原点を、古来の法、慣習、言語、信仰、文芸などに見出すことであつた。古い習慣や長く続いた制度・観念は、それ自体として優れた特性や存在理由を備えているとパキエは指摘している。こうした発言からは、フランス君主政の起源をすべて古代ガリアに求めようとする意図が読み取れる。⁽²⁹⁾本書を執筆した当時のパキエは、ドイツのレナヌなどが開陳していた「フランク人＝ゲルマン人」説を知らなかつたようであるが、あまりにガリア至上主義に偏向したパキエの所説に対して、「トロイア人＝フランク人」起源説に魅力を感じ、肩入れもしていた王権の側は、いささかもてあましていたのではないかと推測される。宗教戦争の渦中で、パキエは熱烈なポリテイク派（王党派）のイデオログのひとりであり続けた。

パキエの先輩格にあたるオトマンは、熱烈なプロテスタントで、カトリューヌ・ド・メデイシスや大法官ロピタルの

信任が厚かったが、国際派の考証学者らしくドイツの事情にも通じていたので、ガリア一辺倒ではなく、ガリアとフランクとの調和的な起源論を提起した。それを示すのが主著『フランコ・ガリア』（一五七三年）で、サン・バルテルミー事件の直後、亡命先のジュネーヴで書かれたものである。⁽³⁰⁾

まずオトマンは、フランスのトロイア起源論を寓話にすぎないと一蹴し、「こうした見方は、歴史家ではなく、詩人の仕事に素材を提供するものでしかない」と述べた。次いでオトマンは、ガリアの言語がギリシア語に似ているとの学説にも疑問を呈している。たとえば、カエサルはガリア人と会話するときに、ガリア語（ケルト語）の上手なトロアキルスという友人を通訳にたてたし、キケロはローマ軍がガリア人の重圍に陥ったとき、近くのローマ軍に救援を求める手紙をギリシア語で書いたという。もちろん途中で伝令がガリア人に捕えられても、手紙の内容が読まれなため予防措置である。オトマンは、ガリア南部でギリシア語が使用されていたことは認めるが、本来的にガリア語とギリシア語は別のものであって、ガリア語・ギリシア語・フランク語にラテン語が交じりあって、現在のフランス語がつけられたと結論づけている。⁽³¹⁾

本書の最大の関心事はフランク王国の成立の経緯である。⁽³²⁾これに関して、オトマンは、ローマ支配以前のガリアが自立的な六四の部族から構成され、政治的には部族連合という民主的な形態をとり、一年に一度の全体集会を開き、危急のときにはひとりの将軍を選出したことを明らかにした。その上で、オトマンは、フランク人の源流を神話的なフランクス王ヤシカンブリア王国ではなく、ライン河以東のゲルマン人に求めようとした。すなわち、フランク人は、おそらく紀元前数世紀には存在が史料的に確認され、ライン河とエルベ河のあいだに住む海の民であり、航海術に優れ、紀元三世紀に強大化した民族であるとされたのである。オトマンによれば、フランクが「自由」を意味するのは、とくに傭兵として仕えたローマ皇帝の命令に必ずしも服従しないで、一定の自由裁量権を保持していたことに

よっている。紀元二―三世紀、すでにガリアの地に入っていたフランク人は、ローマ帝国の圧政に苦しむガリア人を軍事的に支援するようになった。五世紀の中葉、西ヨーロッパに侵入してきたアツチラの軍団に対し、フランク人のメロヴェはガリア人やガリアに駐屯するローマ人の将軍に協力して勇敢に戦い、ついに戦死した。この頃を境にフランクの声望が高まったのである。

オトマンによれば、フランク王国を正式に樹立したのは、伝説的なファラモンでも、史料に残るクローヴィスでもなく、メロヴェの子でクローヴィスの父にあたるシルデリク（ヒルデリヒ）である。シルデリクはガリアに駐屯するローマ人の将軍の奸計により、一時は生命の危険に晒されたが、やがて態勢を立て直し、大軍を率いてライン河を渡ってガリアに入り、トゥルネとカンブレを占領した。フランク人は初めてライン河の内側に支配領域を築いたのである。オトマンは、この遠征がフランク人の征服戦争ではなく、ガリアをローマの軛から解放し、フランク人とガリア人が民族的にも混じりあう契機になったと論じている。そこに、ふたつの民族が融合した「フランクコガリア」王国が誕生したのである。⁽³³⁾「フランクコガリア」という発想は、それぞれに独自の歴史的伝統を有するガリアとフランクの民族が自然発生的に、かつ平和裡に結合されたことを称賛するとともに、フランク人を継承する「国王」とガリア人を継承する「国民」との合体を暗示したものにほかならない。

『国家論』（一五七六年）の著者ボタンは、直接的にフランスの起源論に触れることはなかったものの、歴史研究の手引書として知られる『歴史方法論』（一五六六年）の第九章でこの問題に言及した。そのなかで、ボタンは、起源の問題は該当する民族や家族の誇りや威信に関わりをもつだけに、潤色されやすく、真理の探究がむずかしいと嘆いている。カエサルもアリストテレスも、最終的には神の子へと格上げされてしまったのである。そうした事態を斟酌して、民族の真実の起源を知る方法としてボタンが提案したのは、著作者の誠実さ、言語の残存、場所の描写の三点

の綿密な調査であった。つまり、文献の史料批判と、言葉の派生関係、地理的状况を知る作業である。⁽³⁴⁾

この点で、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語などの学識に超人的な能力を有したボダンは、「フランクIIフランクス」説と「ガリアIIガラテス」説をともし否定した。ボダンの論ずるところでは、ガリア人とはギリシア人ではなく、ケルト人のことであり、語源からいって、ケルトとは森の民、乗馬の得意な民（騎馬民族）である。やがてケルト人は、ガリアの領域を超えてゲルマニア（ヘルシニアの森）にまで広がったことがわかる。なぜなら、ゲルマニアにはケルト語の語幹や語尾をもつ地名が多く残っているからである。また、そうした傍証が、ガリアに伝わる民族移動の伝説、すなわち、セゴネズがゲルマニアに、ペロネズがイタリアに植民活動をおこなったことと合致するからである。⁽³⁶⁾かつてのゲルマニアは、人口も少なく、都市もなく、不毛な土地であった。したがって、トロイア人が落ちのびて定住するはずがない。むしろ土着的なゲルマニアの人びとは、新たに進出してきたケルト人のもつ高度な文化を積極的に受容し、ガリアがローマに支配されたあとも、変わらずケルト文化の伝統を堅持したのである。ボダンの所説をふまえれば、フランク人はケルト文化をも継承したゲルマン人の一部族となるだろう。

四 一七世紀の歴史記述——「フランクIIトロイア起源」説の存続——

一六世紀後半になっても、国王の周辺では依然として「フランク人IIトロイア人」起源説が語り継がれ、国王儀礼にも利用されていた。宮廷詩人ロンサールは叙事詩『フランシヤード』（一五七四年）を国王シャルル九世に献呈している。⁽³⁷⁾しかし、前節で紹介したバキエ、オトマン、ボダンらの解釈が支持の輪を広げるにつけ、神話的な起源論の死命は一六世紀末までにほぼ制せられた。

「考証研究」の碩学デュ・ティエの『フランス国王の集成』（一五八〇年）は、その冒頭で「フランス人（フランク人）をトロイアの出身とみなすよりも、真のゲルマン人に起源をもつと記した方が名誉がある。というのは、名誉は美德にのみ存するからである。また、ゲルマニアほどよい習慣が腐敗しないで、断固として、長期にわたって、武器によって、その自由を保っている場所は他にないからである」と述べて、フランス人がゲルマン人に由来することによって、その自由を保っている場所が十分の資質を備えていた。ガリアとゲルマニア（フランク）を同根とみなすのは、オトマンやボダンと同じ立場である。また、彼は、ガリアで歴史に残るフランス人の王を列挙した箇所、まずフアラモンの名をあげているが、慣例的で簡単な記述に留めている。四二二年、フアラモンがサリカ法を制定したことに触れた箇所では、同じ主旨の法はすでにゲルマニア各地に存在していたと述べており、フアラモンに特別の地位を与えてはいない。⁽³⁹⁾むしろデュ・ティエが正式に初代のフランス国王とみなしたのは、フアラモン、クロディオンに次ぐ第三代のメロヴェであった。メロヴェはフアラモンの直系の子孫ではない。メロヴェの「メル」は長官、「ヴィク」は優れた男の意味であるという。⁽⁴⁰⁾

透徹した合理主義精神の持主で、一六世紀末最高の歴史家と評されるラ・ポプリニエールも、著書『歴史の歴史』（一五九九年）のなかで、トロイアから逃れた民族がいかに多いことだろうと慨嘆したあと、史料に依拠しつつ、逐一トロイア起源説を批判した。⁽⁴¹⁾ラ・ポプリニエールの解釈はきわめて明快で、ホメロスのトロイアの物語が事実であったとしても、勇士ヘクトルの息子は死亡したアステュアナクス一人なので、もう一人の息子フランクスの存在はありえないこと、ギリシア軍の包囲下にあったトロイア人は市街から逃れる術がなかったこと、たとえ脱出に成功しても、海を渡ったり、敵地を通り抜けることは一層困難だったことなどを指摘している。さらに彼は、パリヤトロワな

どフランスの地名がトロイア伝説に由来するとの俗説をも退け、結局のところ、フランス人はヨーロッパ各地に散在したフランク・ゲルマン人の末裔であると論じたのである。

ところが、一七世紀に入ると、定説の地位を確立していたはずの「フランク人・ゲルマン人」説が動搖をきたし、「フランス・トロイア起源」説が復活してくる。それに伴って、フランク王国初代の王としてのファラモン伝説が重要性を帯びてきたのである。そうした議論を好んで取りあげ、神話的なフランスの起源論を展開したが、デュプレクス、シャロン、メズレーなどであった。彼らの多くが「フランス修史官」や「国王修史官」であり、「フランス全史」の著者でもあることは先に触れた。このような時代錯誤的な逆転現象を目の当たりにして、史家ハツパートは、歴史学において厳密さへの関心が薄れたとき、神話的・寓話的な歴史の復活があると警鐘を鳴らしている。⁽⁴²⁾輝かしい「考証研究」の履歴に影がさした一七世紀は、まさに歴史学の沈滞期であり、危機の時代とされる所以である。ここでは、その動きを簡単に概観しておこう。

「フランス修史官」の叔父ベルナルから一六三五年にその官職を引き継いだ文人ソレルは、「フランス君主政の歴史への序論」(二六二八年)のなかで次のように述べている。「著述家(＝歴史家)たちは、存在しなかったこのフランクスについて語るのは馬鹿げていることをよく知っているので、次のようにのみ言っている。落ちのびたトロイア人はドナウの河口にやって来て、その地の住民の許可を得て河岸の近くに住み、徐々にその地を支配し、やがてドイツでも認められ、ガリアにも進出した」と。⁽⁴³⁾そのあと、ソレルが歴史家たちの解釈を順次やり玉にあげていく論法をみると、歴史家とは無責任で、無味乾燥で、自分が依拠する史料をしばしば読み誤り、曖昧で「馬鹿げた」結論へと導くものであると、ソレルは言いたいようである。トロイアであれ、ローマであれ、どんなに優れた帝国や民族も、その起源を史料的には正確に辿れないというのがソレルの持論であった。ただそのことよりも、ソレルが深刻な

事態と受け止めていたのは、フランスの知識人が自国史ではなくて、外国史の方にはばかり目を向けていることであつた。「私が驚くのは、人びとが、自分の国であるのに、フランス史をほとんど顧慮しないことである。知的な人は、わが国王よりもローマのコンスルや皇帝の方をよく知っている。皆の前で語る人はわが国よりも外国の歴史を引用し、宮廷人はわが昔の時代の戦士の武勲よりも、瑣末なローマの方をよく読んで⁴⁴いる」。かくして、ソレルが提唱したのは、フランス人の誰もが関心をもち、共感できる通史としてのフランス史を世に出すことであつた。

同じような問題意識を抱く文人デュプレクスは、大著『教会と帝国を含めてのフランス全史』（一六三四年版では全二巻）の序文で、美德によつて行動するには、歴史書を読み、歴史から学ぶのが最善であること、そして歴史は「人間の生活の豊かな舞台」であると強調した。⁴⁵この書物の第一巻が彼をとくに有名にしていた『洪水からフランス君主政の樹立までの論考』（二六一九年刊行）で、フランク王国以前のガリア史が詳述されているが、それに続く二巻はファラモンからシルデリク（ヒルデリヒ）三世（ファラモンから二一代目）までのメロヴィング王朝の国王列伝となつている。

デュプレクスの記述のうち、本稿との関連で重要と思われる第一の要点は古代ガリアを学ぶ理由についてで、ガリアはかつて世界を支配した栄光に包まれた民族であり、その後フランク人に蹂躪されたとはいへ、フランク人に法と名を伝え、君主政の強化とキリスト教の普及に努めた点で歴史に刻む意義をもっている。⁴⁶しかし、より注目すべき要点は、デュプレクスがガリア史をガリアの語源、地誌、習慣、政治形態、民族移動、ローマや異民族との戦争などを交えて四〇〇ページにわたつて丹念に叙述していることである。そこでは、ガリアの名がガルスやガラテスなどに由来すること、ガリア人が大洪水で生き残つたヤベテの子孫であること、その後ガリアを支配したサモテ（ゴメル）からフランクス（二四代目）を経てローマ時代まで王が四三代続くこと、さらにマルコムールを経てフランク王国のフ

アラモンにつながるなどが延々と綴られている。⁽⁴⁷⁾この点で、デュプレクスの書物はルメールのトロイア起源説に舞い戻った感があり、神話的・物語的な歴史の典型と目されている。

ただし、デュプレクスは「トロイアをフランクスやアンテノールと関連づけるのは、詩人の創作や夢であつて、ローマのアエネイスに倣つたもの」とも述べており、⁽⁴⁸⁾実証主義的な歴史の方法論を知らないわけではなかった。デュプレクスがあえて伝承を積極的に取り入れた背景には、ガリアの地に成立した王朝がフランク王国へと間断なく継承されたことを顕示する政治的な意図があつたと見なくてはならない。この栄光の王統が、フランス王国をヨーロッパでも特別な地位へと昇華させているのである。そのためには、著者が史料を少々恣意的に操作しても何ら問題はなかつたのである。歴史学の君主政への奉仕には、当時の宰相リシュリユーの意志が見え隠れする。

「フランス全史」の著者グループのなかでも知名度がもつとも高く、ルイ一三世やリシュリユーの信任が厚く、幼いルイ一四世を愛読者としていたのがメズレーである。彼の著作『ファラモン以後今日までのフランス史』(初版は一六四三年)は、この種の書物としては珍しくベストセラーとなり、一九世紀まで刊行され続けた。⁽⁴⁹⁾メズレーの主たる関心事はフランク王国以後のフランス通史の叙述にあるが、それ以前のガリア史が忘れられたわけではなかつた。そこには、ガリア人の生活、習俗、祝祭、宗教、気質、政治形態などが描かれており、今日の民俗学にも通じる内容が読者の好奇心を掻き立てる。

本書執筆の目的を端的に示しているのは、メズレーが冒頭の「フランス人の起源と彼らのガリアへの定住」の章で、かつてケルト人と呼ばれたガリア人とゲルマン人の関係史に触れて、ガリア人が栄光の民族であるとともに、ふたつの民族が同根であると示唆したところである。⁽⁵⁰⁾ガリアの起源に関しては、トロイア起源説では陳腐となつているガラテス説やガルス説のほか、ヘブライ語で洪水や氾濫を意味するガレレ説や、ケルト語で故郷を出て各地を旅する

という意味の「ヴァレン (Wallon)」説が紹介され、あらゆる起源説を動員してガリアの聖化が試みられている。ガリア人の発展に関しては、ケルト人は、シゴヴェズ隊がゲルマニアに（さらにギリシアまで）、ペロヴェズ隊がイタリアに遠征したため、ギリシア、イタリア、本来のガリア（フランス）の三つの方面にガリア人の基盤が築かれ、カエサル時代までローマ人と激しい戦いが繰り返されたという⁽⁵¹⁾。

デュブレクスと同様、メズレーはこうしたガリアの起源論や発展論に信憑性の問題があることは承知していた。彼は「……寓話的で、不確実なものは語るに値しない。同じことはフランスについてもいえる。アニウスは彼をヘクトルの息子とし、ガリアにやって来て、レムス王の婿そして後継者になったという。また、幾人かの物語作者は、フランスのあと、父から子へと一四代継承されたという」と述べている⁽⁵²⁾。ただ、そのような疑わしい神話や伝説をも本書に取り入れたのは、「序論」で述べているように、メズレーが常々気にかけていた読者に面白く読んでもらいたいというサーヴィス精神とは別に、ケルト⁽⁵³⁾（ガリア）を継承したのがフランス人のファラモンを始祖とするメロヴィング王朝であり、そこからブルボン王家へと王統が脈々と受け継がれているとの王権の主張を強く意識していたためである。武勇に秀でた「長髪族 (chevelure)」の出であり、日食の年（四一七年か四二〇年と推定される）に盾の上に担がれ、人民から歓呼の声で王に推戴されたファラモンは、その名が意味する「真実の口」とおり正義を司り、フランスの国法ともいべきサリカ法を制定した⁽⁵⁴⁾。本書では、このファラモン以降の歴代国王の「栄光の物語」が肖像画入り、エピソードを織り交せて饒舌に描かれてゆく。語り部としてのメズレーの力量がもつともよく発揮される分野である。いずれにせよ、本書は「フランス全史」のひとつの到達点、換言すれば、その当時の「国民史」の精髓を示すものであった。

おわりに

本稿では、近世前半期のフランスの歴史研究の流れを、フランスの起源説にまつわる解釈や論争を中心に検証してきた。その結果、一六世紀の人文主義や「考証研究」の興隆のなかで、伝説的な「フランス・トロイア起源」説が徐々にメッキを剥がれ、学問的な存立の根拠を失っていったこと、にもかかわらず、そうした伝説や神話が容易に死滅せず、むしろ一七世紀には王権の後援のもと、「フランス全史」というジャンルのなかで復活していることを確認した。

その点を補強して、ここでは、一七世紀の歴史学の停滞や危機を示唆するエピソードをふたつ紹介しておきたい。「フランス全史」の終末期を飾る『ガリアにおけるフランス君主政の樹立以後のフランス史』（二六九六年）を著したダニエルは、あるとき国王図書館に入る機会を得たが、ほんの一時間もすると退出した。図書館のなかに入った瞬間、蔵書がすべて「役に立たないガラクタの山 (Paperasses)」にすぎないと判ったからだという。⁽⁵⁵⁾ また、一七一四年、フレレは、トロイア起源説を神話にすぎず、フランス人をフランス人ではなくドイツ人の祖先であると論じた『フランス人の真の起源についての考察』を発表したため、バスティーユに六ヵ月間投獄された。⁽⁵⁶⁾ それでも、その後、碑文アカデミーの重鎮となるフレレが歴史と神話を峻別する態度にいささかの揺るぎはなかった。

それへの反動であろうか、一八世紀にはほぼ無用の長物と化し、書棚から取り出すのも煩わしいフォリオ版の「フランス全史」は、図書館の奥底でほとんど日の目を見ない存在となった。リエスは、かつてドミナントな存在だった「フランス全史」について、その不可思議さを次のように語っている。「こうして、一六世紀から一八三〇年にい

たるあいだの相次ぎ後続する世代は、この同一の物語——主要部分についていえば隅々にいたるまで確定されてお
り、先行する叙述につけ加えられ、あとに続く編纂者により今度は外されることになるスタイルや修辭、付け足しな
どの違いだけは伴いながら、相変わらず反復される——の単調さの前で引き下がることはしなかった。三世紀ものあ
いだ、それ自身とまるつきり同じ形に留まり、そして同じように盛んに読まれたこのフランス史というジャンルの存
続に、驚かすにはいられない⁽⁵⁷⁾。

ただ、アリエスなど近現代の歴史研究者からは理解不可能で硬直化しているように見える「フランス全史」も、そ
の当時においては、単なるフランス君主政のプロパガンダという以上に、いわば公式の歴史書としての重い任務を担
っていた⁽⁵⁸⁾。近世歴史学の展開をトータルに考察しているゲレルは、この「フランス全史」に、君主政の永続性、古い
民族の起源、フランスの特殊性（神に選ばれたフランス）という三つのフランス王国の原理に関わる要素を析出し、
「フランス全史」がフランスの内外に向けて発信された初期的な「国民史」であったことを指摘している⁽⁵⁹⁾。紙数の関
係で本稿では触れられないが、「フランス全史」は起源問題のあと、ピピン、ユージュ・カペ、フィリップ六世など王
朝の交替のドラマにとくに敏感である。

フランスの起源をトロイア神話やファラモン伝説に求める学説は、一六世紀の「考証研究」が明らかにしたとお
り、まったく荒唐無稽なものだった。とはいえ、国家や民族の起源を論じる場合に、こうした独善的で誇大妄想的と
もいえる現象がよく発生するのは、やはり、起源の問題が国家・民族の存在理由や威信に抵触する問題を内包してい
るからであろう。起源は幾重もの神秘のヴェールに包まれたもので、実証的な研究でその虚構性を暴きだすのは容易
なことではない。この点では、もはや「王家の歴史」ではなくて、「王国史」や「国民史」という要望に応えようと
した近世の歴史学は、それほど単線的な発展の軌跡を描けず、一六世紀の「考証研究」が一七世紀の「フランス全

史」を準備する後退的な局面もあつたのではないかと想定される。一七世紀には、「国民史」の名のもとに、ガリアも、トロイアも、フランクも、ローマもすべてを融合した歴史叙述が望まれたのである。この「フランス史Ⅱ国民史」というフランス独特の様式は、一九世紀に入つて、ミシュレの『フランス史』のスタイルやナレーションにも流れ込んでいくことになる。

- 注 (一) G. Bourd  et H. Martin, *Les  coles historiques*, Paris, 1983, pp. 90-93.
- (二) F. Fossier, La charge d'historiographie du 16^e au 19^e si cle, *Revue Historique*, 258, 1976, pp. 75-92; id.,   propos du titre d'historiographie sous l'ancien r gime, *Revue d'Histoire Moderne et Contemporaine*, 32, 1985, pp. 361-415; C. Grell, L'histoire en France et le mythe de la monarchie au 17^e si cle, dans Y. M. Berc  et P. Contamine ( ds.), *Histoire de la France, historiens de la France*, Paris, 1994, pp. 165-167.
- (三) B. Barret-Kriegel, *Les historiens et la monarchie*, 4 vol., Paris, 1988, t-4, *La R publique incertaine*, pp. 97-114.
- (四) R・シヤルチエ (長谷川輝彦・宮下志朗訳) 『読書と読者』みすず書房、一九九四年、第五章「書物から読むこと」を参照。
- (五) B. Barret-Kriegel, Historiographie et histoire du droit aux 17^e et 18^e si cles, dans Y. M. Berc  et P. Contamine ( ds.), *op. cit.*, pp. 191-197.
- (六) J. M. Biziere et P. Vaysi re, *Histoire et historiens: Antiquit , Moyen  ge, France moderne et contemporaine*, Paris, 1995, chap. 4.
- (七) 前川貞次郎『歴史を考へる』ミネルヴァ書房、一九八八年、一〇八ページ。
- (八) O. A. Ranum, *Artisans of Glory: Writers and Historical Thought in the 17th Century France*, University of North Carolina Press, 1980, p. 63.
- (九) W. F. Church, *Constitutional Thought in 16th Century France*, Harvard University Press, 1941, pp. 180-186; F. Olivier-Martin, *Les lois du roi*, 1997, pp. 98-102.

- (10) W. F. Church, *op. cit.*, pp. 156–160 ; P. Bouetier, Etienne Pasquier et l'histoire de France au 16^e siècle, dans Y. M. Bercé et P. Contamine (éds.), *op. cit.*, p. 146. 近世フランスの三部会の意義については、次の文献を参照。Y・M・ベルセ(阿河雄二郎訳)『国王統治における全国三部会の役割』二宮宏之・阿河雄二郎(編)『アンジアン・レジームの国家と社会―権力の社会史へ』山川出版社、二〇〇三年、三三一―六二ページ。
- (11) A. Jouanna, *La France au 16^e siècle, 1483–1598*, Paris, 1996, pp. 162–169 ; M. Yardeni, *La conscience nationale en France pendant la guerre de religion, 1559–1598*, Paris, 1971, chap. 4.
- (12) C. Grell, *Les historiographes en Europe de la fin du Moyen Âge à la Révolution*, Paris, 2006, p. 139.
- (13) (14) C. Beaune, *Naissance de la nation France*, 1988, pp. 28–31.
- (15) *Ibid.*, p. 23.
- (16) B. Guené, *Les Grandes Chroniques de France : le nom aux rois, 1274–1518*, dans P. Nora (éd.), *Les lieux de mémoires*, II, *la Nation*, Paris, 1996, p. 191.
- (17) *Ibid.*, pp. 195–202.
- (18) 江川温「ユリの花と十字架と——中世盛期・末期の王権と聖ドニ崇敬」田辺保(編)『フランス学を学ぶ人のために』世界思想社、一九九八年、五一―五二ページ。
- (19) ルメール・ド・ベルジユの作品のテクストについては、次の文献を参照。J. Abélard, *Les illustrations de Gaule et Singulartez de Troie de Jean Lemaire de Belges, étude des éditions*, Genève, 1976. フランスを超えて、中世から近世にかけての西欧全体の民族意識の進展を論じた江川温「西欧の民族史観とヨーロッパ・アイデンティティ」谷川稔(編)『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社、二〇〇三年、一二五―一三二ページが参考になる。
- (20) R. E. Asher, *National Myths in Renaissance France : Francus, Samothès and the Druids*, Edinburgh University Press, 1993, chap. 1.
- (21) これに関しては、以下の文献を参照。R・ストロング(星和彦訳)『ルネサンスの祝祭』(全二巻)平凡社、一九八七年、上巻・第一部・第二章「帝国の視覚像、皇帝カール五世の巡幸」。藤田一成『皇帝カール五世の悲劇——ハプスブルク帝国の継承』平凡社、一九九九年、第一章「カルロス五世の世界帝国」。

- (22) R. E. Asher, *op. cit.*, pp. 13-15. なお、F・A・イエイツ（西沢龍生・正木晃訳）『星の処女神とガリアのヘラクレス』東海大学出版会、一九八三年も参照。一六世紀頃のドイツの状況については、佐々木博光「出自神話で見るドイツ史」『人文学報』（京都大学人文科学研究所）七一、一九九二年が参考になる。
- (23) L. M. Bryant, *The King and the City in the Parisian Royal Entry Ceremony: Politics, Ritual, and Art in the Renaissance*, Genève, 1986, chap. 2 and chap. 5. リヨンの「入市式」については、小山啓子『フランス・ルネサンス王政と都市社会』九州大学出版会、二〇〇六年、第三章「一六世紀リヨンの入市式について」を参照。
- (24) R・ストロング、前掲書、上巻、五七ページ。
- (25) R. E. Asher, *op. cit.*, p. 19.
- (26) R. Mass, *Recherches sur les Gaulois et sentiment national en France au 18^e siècle*, *Histoire, Économie, Société*, 1990, p. 165.
- (27) J. M. Bizière et P. Vayssière, *op. cit.*, p. 88.
- (28) 本稿では、バキエの『フランスの探究』のテキストとして、一六三三年版を用いた。E. Pasquier, *Les recherches de la France*, Paris, 1632, p. 38.
- (29) C. Vivanti, *Les recherches de France d'Etienne Pasquier, l'invention des Gaulois*, dans P. Nora (éd.), *op. cit.*, p. 221.
- (30) W. F. Church, *op. cit.*, p. 156.
- (31) 本稿では、オトマンの『フランコロガリア』のテキストとして、*Franco-gallia by F. Horman*, Cambridge University Press, 1972 を用じた。Ibid., pp. 157-159, pp. 207-211.
- (32) Ibid., chap. 4.
- (33) Ibid., p. 217.
- (34) 本稿では、ボダンの『歴史方法論』のテキストとして、*Oeuvres philosophiques de Jean Bodin, texte établi, traduit et publié par Pierre Mesnard*, Paris, 1951 のラテン語⇨フランス語の対訳版を用じた。Oeuvres philosophiques, ibid., p. 449.
- (35) Ibid., pp. 453-455.
- (36) Ibid., p. 456.
- (37) B. Guené, art. cit., p. 194.

- (38) 本稿では、デュ・ティエの『フランス国王の集成』のテキストについては一六〇七年版を用いた。J. du Tillet, *Recueil des roys de France, leurs couronne et maison*, Paris, 1607, p. 1.
- (39) *Ibid.*, p. 10.
- (40) *Ibid.*, p. 12.
- (41) Lancelot du Voisin de La Popelinière, *Histoire des histoires*, Paris, 1988, p. 302, p. 317, pp. 336-337; J. M. Bizière et P. Vaysière, *op. cit.*, pp. 94-96.
- (42) G. Huppert, *L'idée de l'histoire parfaite*, Paris, 1963, pp. 87-89.
- (43) C. Sorel, *Advertissement sur l'histoire de la Monarchie française*, Paris, 1628, p. 73.
- (44) *Ibid.*, p. 1.
- (45) 本稿では、デュプレクスの『フランス全史』のテキストについては、一六三四年版を利用した。S. Duplex, *Histoire générale de France avec l'estat de l'église et de l'empire*, 2 vol., Paris, 1634, Au Roy.
- (46) *Ibid.*, Au Roy.
- (47) *Ibid.*, pp. 19-30.
- (48) *Ibid.*, p. 5.
- (49) O. A. Ranum, *op. cit.*, p. 206.
- (50) (51) 本稿では、メスレーの『ファラモン以後のフランスの歴史』のテキストとして、一六八五年版を用いた。F. de Mézeray, *Histoire de France depuis Faramond jusqu'au règne de Louis le Juste*, Paris, 1685, pp. 4-5.
- (52) *Ibid.*, p. 4.
- (53) W. H. Evans, *L'historien Mézelay et la conception de l'histoire en France au 17^e siècle*, Paris, 1930, pp. 83-84.
- (54) *Ibid.*, pp. 195-196.
- (55) C. Grell, *L'Histoire entre érudition et philosophie*, Paris, 1993, p. 199.
- (56) B. Barret-Kriegel, *Histoire à l'âge classique*, Paris, 1988, p. 183.
- (57) P. アリエス(杉山光信訳)『歴史の時間』みすず書房、一九九三年、二〇〇ページ。

- (88) (89) C. Grell, *L'histoire entre érudition et philosophie*, op. cit., pp. 200-201 ; id., *Histoire intellectuelle et culturelle de la France du Grand Siècle, 1654-1715*, Paris, 2000, pp. 195-198.

【追記】

本稿は、平成九―一一年度科学研究費による研究成果報告書に掲載された「フランス国民ロトロイア起源神話の展開——近世フランスの歴史記述のひとこま」に大幅な加筆修正を加えたものである。